

全農育成スプレーギク品種の開発

～平成23年度で品種開発20周年を迎えました!～

スプレーギクは、1茎多花の小・中輪タイプのキクで、花色や花型が豊富で、用途が多岐にわたるため、国内需要を伸ばしている品目である。全農 営農・技術センター 農産物商品開発室では、平成3年からスプレーギクの品種開発に取り組んでおり、平成23年度は20周年にあたる。40品種以上が、JAグループオリジナル品種として施設栽培の産地を中心に生産されており、年間の生産本数も1,000万本に届こうとしている。

「スプレーギク部会リーダー研究会」を開催

スプレーギク品種開発20周年を記念して、生産者団体である「日本花き生産協会」が2年に1回開催している「スプレーギク部会リーダー研究会」を営農・技術センターに招致した。6月27日～28日に行われたこの研究会



▲スプレーギク品種開発20周年記念の横断幕



▲リーダー研究会の講演の様子

には、全国のスプレーギク産地のリーダーら100名近くが集まった。全農が得意とする「夏秋ギク」の生産技術をテーマに、日本にスプレーギクを普及させた川田穰一氏、(独)農研機構 花き研究所の住友克彦氏による講演、生産者を交えたパネルディスカッションなど盛りだくさんの内容で、活発な議論や意見交換を行った。また、新品種を中心に全農オリジナル品種の展示を行った。

リーダー研究会の講演とパネルディスカッションの概要は次のとおりである。

講演「夏秋ギクの特性と育種目標」

富山県南砺市園芸植物園 名誉園長 川田穰一氏

開花調節の理論を含めた夏秋ギクの特性、生産上の課



▲スプレーギク品種の圃場展示

題と、それらに基づく育種目標について講義していただいた。併せて、無病苗の生産とその供給の重要性について、説明いただいた。

夏秋ギク品種の育種目標の要点は次のとおり。

- ①適日長限界が14時間以上で、同時に暗期中断により9月まで花芽分化を阻止できる品種
- ②高温による開花遅延と品質低下の少ない品種
- ③栽培期間の短い品種

栽培期間は、定植から消灯までの長日下の栽培期間と、消灯から開花までの短日下の栽培期間から成る。したがって、草丈の伸長が早く、開花反応期間が短い品種が望まれる(表-1)。

表-1 キク品種群の自然開花期を支配する発育相別特性
(川田、船越・1988年)

品種群名	ロゼット性	幼若性	感光性		開花反応期間
			限界日長	適日長限界	
夏ギク 早生	極弱	極弱	24時間		
夏ギク 中生	弱	弱			
夏ギク 晩生	弱	弱			
夏秋ギク 早生	—	中	17～24時間	13～14時間	7～8週
夏秋ギク 中生	—	中～強	未満	13～14時間	7～8週
夏秋ギク 晩生	—	中～強	17時間	12～13時間	7～9週
秋ギク 早生	—	—	14～15時間	12時間	8～10週
秋ギク 中生	—	—	13時間	12時間	9～10週
秋ギク 晩生	—	—	12時間		11～12週
寒ギク	—	—	11時間以下		13～15週

④切り花品質のよい品種

切り花の品質は、水揚げ、日持ち、花色と花型、花と葉のバランスなどから総合的に判断される。

⑤病害虫に強い品種

夏秋ギクは高温期に栽培されるので、病虫害を受けやすい。病虫害に強い品種の育成が望まれるが、対象となる病虫害の種類が多いため育種目標としては取り上げ難い。品種の発表前に検定を行い、病虫害の発生しやすいものの発表を控えるというのが現実的であろう。

講演「夏秋ギクの安定的開花制御に向けて」

(独) 農研機構 花き研究所 花き研究領域 研究員 住友克彦氏

短日植物であるキクの生産では、花成抑制のために夜間数時間電照をつけることで疑似的な長日条件をつくる。しかし、夏秋ギクの一部品種では、電照をつけても花成を抑制できず、計画よりも早く草丈が低い状態で開花してしまうことがある。このような課題に対し、花き研究所の研究成果から、発根させた親株を長期間低温に遭わせることが花成抑制に効果があることを紹介いただいた。また、発根させていない挿し穂では冷蔵の効果が小さいこと、花成抑制のためには一定期間以上の冷蔵が必要であるとのことであった。

パネルディスカッション

「スプレーギクの品種選択、栽培課題などについて」

主要7産地の代表者から夏秋ギク栽培の課題などについて報告をいただいた。病虫害の発生、下葉の黄化、花成抑制が働かないために起こる早期発蕾、キクわい化ウィロイドによる被害など、秋ギクの栽培に比べ多くの課題があることが浮き彫りとなった。また、これら課題の克服はもちろん、花色や花型のバリエーションの増加や花色の安定など、夏秋ギク品種に求められる特性が多いこともわかった。

平成23年度夏秋ギク新品種の紹介

夏季は盆と彼岸という大きな需要期をかかえているため、需要期に合わせて出荷できる品種は重要である。しかし、平成22年度の夏のように、記録的な酷暑に見舞われると、開花が遅れる品種が多い。そのため、全農では、酷暑のなかでも、ねらった時期に出荷できる



▲テヨン



▲ユナ



▲トラキア

スプレーギクの育成に特に力を入れている。平成23年度も、昨年度の試験で開花の遅れが少なかった以下の夏秋ギク新品種を発表した(表-2)。ぜひお試しください。

テヨン

ホワイト、シングルタイプの夏秋ギク品種。到花週数は7週で、切り花長*は中。花径は5~6cm程度の中輪で、輪数が多く、ボリュームのある切花になる。どの作型でも開花が早く、高温期の開花遅延が起りにくい品種。また、開花揃いも良好である。

*切り花長: 中 90~100cm、大 100cm以上

ユナ

ピンク、シングルタイプの夏秋ギク品種。到花週数は7週で、切り花長は大。花径は5~6cmの中輪で、涼しげな淡いピンク色であり、夏季の需要が見込まれる。また、平成22年の酷暑でも開花の遅れや色褪せが少なく、高温に強い品種である。

トラキア

オレンジ、シングルタイプの夏秋ギク品種。到花週数は7週で、切り花長は中。花径は6~7cmの大輪で、少し赤味がかったオレンジが綺麗で、色褪せも少ない品種。生育の初期から伸長性が高く、軸もしっかりしている。

表-2 平成23年度発表夏秋ギク新品種の特性

品種名	花色	花型	到花週数 (週) * ¹	切り花長 * ²	切り花重 (g) * ³	花径 * ⁴
テヨン	ホワイト	シングル	7	中	50	中
ユナ	ピンク	シングル	7	大	45	大
トラキア	オレンジ	シングル	7	中	45	大

*1: 電照打ち切り(消灯)後、12時間日長での開花日数

*2: 中 90~100cm、大 100cm以上

*3: 80cmに調整後の切り花重量

*4: 中 5~6cm、大 6cm以上

●問い合わせ先

詳しい説明やパンフレットの請求は下記まで連絡いただきたい。

全農 営農・技術センター 農産物商品開発室

☎0463-22-1024

【全農 営農・技術センター 農産物商品開発室】